

# 都市の形成と広場の発生

—ラテンアメリカにおけるスペイン植民都市とブラジル移民都市を中心に—

中岡義介

はじめに

一 リマの都市図と広場

二 ブラジル移民都市における広場の実態

## 論文要旨

ラテンアメリカの諸都市の多くは、一六世紀以降、新世界づくりに集まった人々によって計画的に建設された。これらの諸都市では、都市建設の様子とそれ以後の変容を知ることができ、したがってそこの広場のあり方、都市と広場の関係などを把握することができる。

そこで、これまで現地調査を重ねてきたラテンアメリカの諸都市の中から、スペイン植民都市とブラジルにおける移民都市とを取り上げ、それらの都市における広場について考えることにした。なお、スペイン植民都市では副王都リマを、ブラジル移民都市ではイタリア系、ドイツ系、日系の各移民都市を取り上げ、日系移民都市は詳細にわたって考察した。

スペイン植民都市は、都市建設の仕方などを詳細に定めた『インド法令』にもとづいて建設された。ここでは広場は一街区を占めてつくられることとされた。都市において広場が占める役割は、そこで生活する人々と広場との関係を超え、都市全体を象徴的にまとめ上げることに力点がおかれた。その様子は、副王都リマの都市図の歴史に変わらぬに描かれている。

一方、ブラジルにおけるイタリア系、ドイツ系、日系の移民都市では、広場は生活に直結したものとなり、それぞれの出自の文化ともいべきものが

三 日系移民都市におけるコミュニケーションの実態  
四 考察—都市における広場のあり方

その基礎をなしている。イタリア系移民都市では、広場はカトリック教会とともにある。プロテスタントのドイツ系移民都市では、教会前の広場にはほとんど意味が見いだせず、そのかわりに商業を含めた広い意味での組合をつくり、それを施設群として彼らの広場とした。日系移民は、日本人会というネットワークをつくったが、それは都市の中に明確な空間となつてあらわれはしなかった。

これらのラテンアメリカの都市は異なる原理を組み込みつつ変容を遂げつつあるが、広場のあり方、都市と広場の関係の基底を今なお色濃く読み取ることができるといえる。

以上のような考察から、広場づくりの契機として、①都市理念、②宗教、③権力、④商業、⑤つきあひを見いだすことができた。一方、広場の空間をみると、①空間化するもの、②組織化・制度化するものを見いだすことができた。「見える広場」と「見えない広場」といってもよい。これらが組み合わさつて広場がラテンアメリカの都市に生み出されている。ラテンアメリカの都市のこのような状況は、広場を見通す一つのパスベクトイブを提示することになると考えられる。